

## ちぎれ雲[承前] : 文苑

著者	卯の花
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 1 2
ページ	3 3 - 4 0
発行年	1905-06-19
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5838">http://hdl.handle.net/2298/5838</a>

かの彼方には、アーネストの額のまはりにある白髪をやう、周圍一面、白い狭霧につつまれて、黄金色なる入日の光線の中に高く、巨人の岩は燦然として見えて居る。その莊嚴な寛大な姿と云つたら丁度全世界をひとだきに抱きでもするやう。

その瞬間にアーネストの顔は、將に發言せんとして居る思想にふさはしいやうに、一種仁愛を加味したる、何とも云へぬ莊嚴な姿を呈したのである。それが爲め、詩人はとう／＼耐へきれずに、兩手を高くさしあげながら叫び出した。

『見よ、見よ、アーネスト自身が巨人の岩にそつくりでないか』

其時皆の者がそなたを眺めやつたが、實に此眼光達者な詩人の言が眞實であると云ふことを見たのである。

あふ、豫言は今にして満たされたのである。

けれどもアーネストは言はんと欲するだけを言ひ終つて、自分よりも更に賢く、更に善良で、彼の巨人岩に似て居る人が、次第に現はれ來らんことを望んで、再び詩人の手を取りながら、徐ろに家路をさして辿るのであつた。

(完)

もぎれ雲

卯の花

## 自然

百合の花の美しきを只美しとする勿れ、其清く白きを只白きとする勿れ、美しき姿と高潔なる白色  
 とには永遠の生命の秘めあればなり、胡蝶舞ひて花の精に嘯く時誰れか其真理の聲に驚かざるもの  
 あらんや、胡蝶乱れて狂ひ飛ぶ、實に自然の手の内に遊ぶ彼等は、神の榮なる哉、我等神の子と  
 稱ふる人類は、自然の道を離れて、只空しき榮々に迷ひ、夢の夢をたどりて、跡なき影を追ひ、土  
 より出でし光を金と云ひ紫深き葡萄の汁を酒と云ひ已か慾に従ひて暗きをのみ歩む、  
 人の情の薄くして、浮世の風を防ぎ得ず、身に染む風の冷さに、黄金の光も美からず、葡萄の汁も  
 甘からず、漸く無明の闇を知りて、自然の門に入らんとすれども、江水江花極りなくして、我が思  
 びに極りあり、あゝ汚れしは人の心よ、あゝ弱きは人の靈よ、思へば蝶の嘯さを美しき福音の響よ、  
 神の子と稱ふるものよ、散る花を見て悲しむ勿れ彼等をして美しく散らしめよ、彼等は散らざるべ  
 からざればなり、逝く水を見て嘆く勿れ彼等をして清く流れしめよ、彼等は流れざるべからざれば  
 なり、彼等自然の懷の中にあるものは、永久に幸なればなり

## 悲

山をはなれて行く雲の夕の宿を問ふ勿れ、梢吹きまく木枯の疲れて休む地を探ぬる勿れ、そは人の  
 世は何處より來り何處に行くべきか知らざればなり、洛陽の女兒、顔色を惜み、行く／＼落花に  
 逢ひて、長嘆息す、隣なる者よ、常久の國を求むる勿れ、昔は人の充ちたりし此の都邑、今は凄し  
 き様にて坐し寡婦の如くになれり、あゝ諸々の民の中にて大なりしもの、諸々の州の中にて女王た

りし者、今は却て貢を容るゝものとなりぬ」げにや人は皆草なりその榮は野の花の如く、其の榮華は夢の如くツロモンの榮華の極みだに野の百合にだも若かざりき、北風地を吹き、南山月斜なる時、一曲の胡茄曲終らざれども、悲衰の調べは人世を愁殺し、嘗ては吳王宮裏、花の如き美人を輝せし月今徒らに人世に泣く、されど人よ徒らに悲しみを歌ふ事勿れ世の榮華に迷ふ時、肉の思ひに耽る時、野に走りて百合に聞け、荒野に行きて風と語れ百合に滴る清き露、荒野にすさぶ悲風は混びに沈む人の世に悲衰を告げ、再び樂しき救を語る、憐れなる世の人よ徒らに悲むを止め、鹿の溪水を慕ひて、喘ぐごと汝を靈も愛の水に喘げ、曙の鹿の調を、怜長と共に歌へ、さらば草は萎むとも我等に常久の春あらん、人の耳襲すとも唯れか此聲聞かざらんや「天國は近けり悔に改めよ」

永 遠

白髮三千丈、縁愁似個長、

不知明鏡裏、何處得愁霜、

頭髮の白きは人の老を示すや、身軀の活動の止るは人の死なりや？月は万代を輝して猶光あり、風は万年に渡りて猶響あり、然らば我等に何ぞ老ひあらん何ぞ死あらん、

A simple child,

that light draws is death,

What should it know of death.

Wardsworth,

純白は單一なり、單一は無限なり、無限は永遠なり、人の身に罪なくして心の純白なる時、何んぞ我れ等に老ひあらん、死あらん

血

血！紅染むる紅の血にぞ古今幾他の悲劇、悲衰の樂譜は秘めあるなれ、戰場に倒れし青春の若者の血を擧りて生れし若草は、萌てては枯れ、枯れては萌て、兵者共が夢の跡濃かならねども、星辰の循環と共に、絶る時なし、實に血の奥に潜める力こそ最も強き力なれ、ナザレの聖者の清き血は十字架に流れ人てふ民草は此の血を擧り茲にはじめて新生命を得て萌て出でぬ

Lo ! where the crucified christ from his cross is gazing upon you !

See ! in those sorrowful eyes what meekness and holy compassion !

Longfellow

血の教訓は、虚偽の世の似世非道學の興る所ならず真に心の悶へに泣き憂に叫ぶ靈の真情の流露には無限の慰めにして永久の福音なり、

歸

Wondrous truth, and manifold as wondrous,

God hath written in those stars above;

But not less in the bright flowers under us

Stands the revelation of his love.

And the post faithful and far seeing,

Sees, alike in stars and flowers apart

Of the self same universal being

Which is throbbing in his brain and heart

Longfellow

天上の五衰黄梁の一睡は、人生常なりと雖も、我等が靈の渴仰憧憬の對象たる、絶大の美は、常久に清く美しくして無限永劫に衰へ凋まざるなり花間に起る春觀樂の調に誘はれ、胸に奇しき想ひの動くまゝ靈界の海に遊ばむと、胡蝶の羽に打乗りて莊周か夢の跡をたどりつゝ、美はしき花の間をさまよへば、匂濃かなる氣にうたれ花に醸せし酒に酔ひ、身は既に仙化の喜ひあり塵寰は低く闇に消へ喧鬧雜聲足下に無く、大化霧中に滌ふ事しばし不思議や、集ふ天使の聲頭上にあり、あゝ我れ既に天に昇れるかと不思議の眠刮りつゝ無窮の周圍を眺むれば下界にて星と見つるは小花の群、天の川邊に咲く花の、露のこぼれて落つるは地上の雨、あゝ美しきは地の景色よ嚴めしきは天の眺めよ、思へば尊きは神の御旨かな、げに美しきは神の御業かな、人の靈も花の精も蒼穹の嚴も、其の内部に秘めある真情の宮殿に至りては、皆一にして、愛の流れの一筋は、宇宙のものを結びて一となすなり萬象異りと雖も神にありては人も花も歸一、同化せり。

泣く。高き處より、遠く響く。涙は、人の心を、雨に似せり。

文

夕花野に逝く春を惜しみ、胡蝶に來ん春の逢瀬を契りつゝ、木の下蔭に佇みて見るをなせに雲の去來を眺むれば雲無心而出岫で坐ろに熱き涙の頬に流るゝを覺へ、心中悲衰の情に耐へざるなり。此の悲衰の情や悲觀の悲みにあらず、不運不幸の涙に非ず、涙の熱きは、失戀の燃ゆる涙に異ならざれども、湧き出る源は同じからずして而も我れ何處より湧くかを知らざるなり。只老松悲風に鳴る音を、天地の悲しの聲とすれば我が涙は其の涙なり。

A feeling of sadness and longing, That is not akin to pain, And resembles sorrow only, As the mist resembles the rain.

苦みの爲めに非ず悶への爲めに非ず、心の奥殿より流るゝ讚美の涙なり。

夢

某月某日の戦後血尙ほ腥き滿洲の原を馬蹄の音も高らかに月影戴きて坐ろ歩きせる夜半、流石に鬼哭の聲は聞へざれども凄しかりし砲聲の般々たりし響勇しかりし突喚の聲尙ほ耳に聞くが如き心地しつ、隈なく輝す月光を浴み四方の眼界を眺るに只茫茫莫々として高粱の畑幾十里、星影二ツ三ツ天のかなたに笑めるのみ

ゆくりなくも敵の遺棄せる死屍に躓きしかば、坐ろに起る妙奇心に驅られ馬を下りて其かポケット

を尋ねるに、やさしからずや貴からずや、小形の聖者の文一卷金縁の色も鮮かに、月光に輝き出でぬ  
我れは其の金色の光に魅られて胸打騒ぐまゝ無心に冷へし腕を取り想靜かに蒼穹を仰見昔ダビデ京  
詣ふでの時月下に立ち歌らく

夜間、エホバのいへにたちエホバに事ふるもろもろの僕よエホバをほめまつれなんちら聖き所に  
むかひ手をあげてエホバをほめまつれ、ねかはくはエホバ天地をつくりたまへるものシオンより  
汝をめぐみたまはんことを

順境のダビデ、平和の子なるダビデは、星辰燦爛たるエホバの家に立ち、其の偉大に驚き其の美を  
讚へたり、今逆憶の我れ、戦の子の我れ、子規枝上月三更、悲哀の念に充たされつゝ、晝は仇とし  
て鎬を削りしに、今は共にエホバの家に立ち暖き手と冷き手を合掌して、祈禱を捧ぐるなり悲しか  
らずや、敵と生れ味方と生るゝも前世の約束にも非ず、七世迄も恨ある仇にも非ず、陽炎の生命を  
頼みて生命を暗すれども思ひ至りて大悟し徹底すれば等しく人の子神の愛兒なり、世に罪惡の有る  
限り、汚れの思ひある限り、淨土の國の建設の爲め斯くも悲惨なる犠牲の血を拂はざるべからざる  
なり、我れ冷き腕を握りつゝ屍と共に歌ひて曰く

月高粱に影さして、

乾坤寂を守る時

默念の想のしばらくを

エホバの門に我れ立て



神の宮居と仰ぎ見る。

有限有象の人の身も

靈想たまひの天を翔る時

常住の家をここに見て

エホバの業の我が身をば

靈の宮居とかへり見る

漸く調べの音も高からんとするに是れなん華胥の國の旅路、南阿の夢なりき

### 新 体 詩

### 春 園

白月

春の日ゆるう光りなげ

こゝめ櫻の盛りなる

緑の芝の細路は

薔薇の雪に埋れけり

黄や紅、白や薄紅や

濃さも淡さも八重一重

咲きてまた散り散りて咲く

春の園生は花に満つ